窓からローマが見える

池田満寿夫

角川書店

窓からローマが見える

池田満寿夫

角川書店

●窓からローマが見える
昭和五十四年三月三十日　初版発行
●著者——池田満寿夫
●発行者——角川春樹
発行所——株式会社角川書店
東京都千代田区富士見二—十三—三
電話〈〇三〉二六五—七一一一〈大代表〉
郵便番号一〇二　振替東京三—一九五二〇八
印刷所——旭印刷株式会社
製本所——株式会社宮田製本所
©Masuo Ikeda, 1979
Printed in Japan
0093-872244-0946(0)

840円

目次

● 窓からローマが見える——3
● マネキン——91
● 黄色い犬——119
● 後記——171

装丁　勝井三雄
表紙画・本文写真　池田満寿夫
表紙画「微風」breeze, 1976

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo

窓からローマが見える

不意にパンテオンの前に出た。
陽は大きなドームにさえぎられ、私は影のなかにいた。
正午近かったのに広場には人影はまばらだった。道路にせりだした向いのカフェテリアのテーブルに一人の老人が坐っているにすぎなかった。
だが、そこには陽があたっていた。
十一月の弱々しい日射しだったが、遠くからでも老人は満足そうに見えた。
私はゆっくり二五〇ミリ望遠レンズ付きのカメラをバッグから取り出し、ファインダーをのぞき、老人に焦点を合わせた。彼はコーヒーを口許へ持っていくところだったが急に咳込み、慄える手でコーヒーカップを握り、宙に浮かせたままじっとしていた。手の慄えはなかなかやまなかった。
テーブルの上の受皿にカップをもどそうとするのだが、腕が宙で硬直し、どうする

ことも出来ないでいた。カップからコーヒーがこぼれ落ちないのが不思議なくらいだった。

咳が終ると、今度は口の方から空中のカップに近づけた。手と一緒に顔全体が揺れている感じがする。

一台の乗用車が通過し、ファインダーの視界をさえぎった。私はカメラを目から離した。過ぎ去った車の窓に見えた女の横顔が妙に私の脳裏に残った。女は白い毛皮の帽子をかぶっていた。

だが、もうその女の輪郭を思い出せない。

私は視線を再びあの老人のいるカフェテリアの方にもどした。肉眼では顔の表情までは解らない。

老人は体をまげ、首をのばしてテーブルの上のコーヒーカップに口を突き出し、わずかに無骨な手でカップを傾ける仕草だけでコーヒーを飲もうとしていた。ここからは聞こえるはずもなかったが、手もカップもふるえ、受皿の上でカップが硬質で無愛想な音をたてているに違いなかった。

さっきまでいなかった給仕が、老人の右後方で空いているテーブルに昼食用のクロ

スを掛けているのが見え、遠くからでも鼻髭だけが妙に目立った。背をまっすぐ伸ばし、真赤なテーブルクロスの束を小脇にかかえ、別に急ぐでもなく、のろすぎるということもなく、しかし適度にリズミカルに片手だけでクロスをテーブルの上に配置している。

私は再びファインダーをのぞき、背の高い給仕がうずくまっている老人と垂直に一線上に並ぶ瞬間を待っていた。特別な意図があったわけではなく、唯その瞬間を予想できたからにすぎない。

期待通り髭をたくわえた給仕が老人の背後に来ると、うずくまっていた老人が不意に立ちあがった。

シャッターを切った時、給仕は老人の背後に隠れてしまっていたに違いない。しかも運悪く次のシャッターを切る直前に、別の乗用車がファインダーを横切った。続いてオートバイが横切り、ファインダーのなかに老人の上半身をとらえた時、給仕は構図のなかからはみ出ていた。

年老いた男は灰色のソフトをかぶり、灰褐色の少々古びたバーバリのコートを着ていた。この顔は年老いたデ・キリコに似ていなくもなかった。多分この男に無意識の

うちに興味を持っていたとしたら、そのためだったかもしれない。二週間前、デ・キリコはローマの自宅で死んだ。九十歳だった。あの年老いても巨大で傲慢な鼻と飽食でなおかつ肉感的な真紅の唇を持った怪物。彼の形而上学的な絵画を愛していたが、あの顔にはどうしてもなじめなかった。

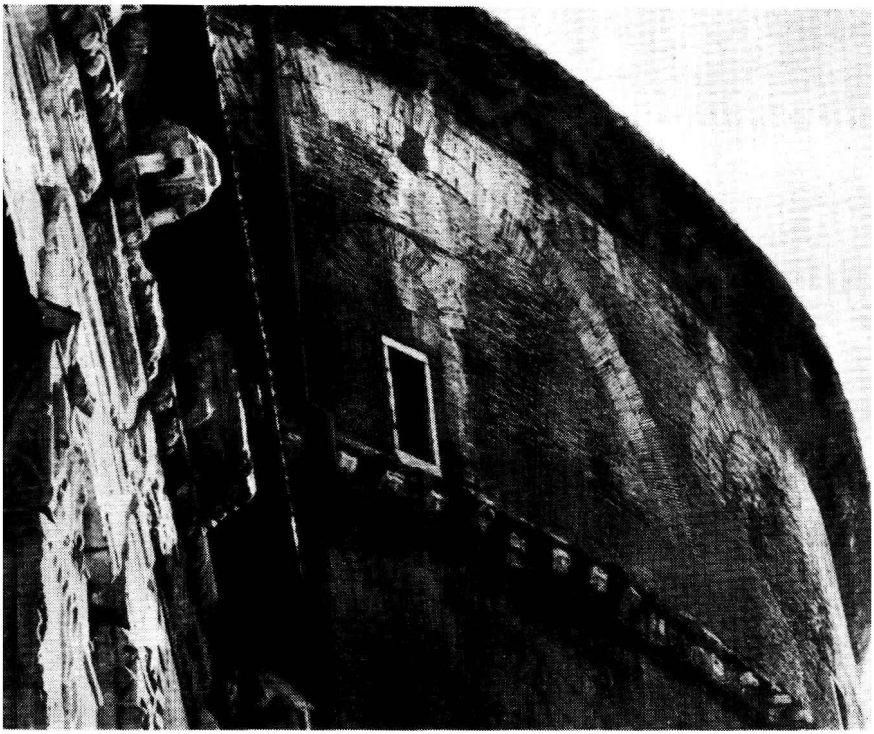
もっとも今カメラの方に向って立ちあがったばかりの老人は、巨大な鼻と肉感的な唇をのぞいて、デ・キリコほどの威厳はなかった。頭部だけ異様に大きく、コートを着た胴体の方は大変貧弱だった。そうだ、給仕の方は確かにサルバドル・ダリに似ていなくもなかったはずだ。デ・キリコとダリに偶然似た男達。私は二人を垂直に並べて撮ろうとした意図をやっと了解した。

あわててファインダーをのぞいたまま、カメラだけを動かし、給仕の方を追った。偽のダリは急ぎ足で道路に並べられたテーブルの間を縫って店内の方へ向っていた。給仕が丁度廂の影のなかにさしかかった時、黒いコートを着てこちら側に背を向けテーブルの前に坐っている女に呼び止められた。

女は何かを注文し、給仕は愛想よく答えて店内に消えた。

廂の影のなかにいたせいか、その女に今まで気がつかなかった。どう考えてもダリ

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo



Pantheon

の給仕とデ・キリコの老人とが再び垂直に並ぶ機会はなさそうだった。

老人はすでに道路に並べられたカフェテリアのテーブルの領域から離れ、広場の中心に向って歩いていた。私の関心も老人から女の方に向いていた。というのも、こちらに背中だけしか見せていなかったが、その女の背後に見覚えがあったからだ。

ファインダーから目を離し私は広場全体をぼんやり眺めていた。さっきよりは人の往来が多くなっている。だが、がらんとした感じには変りがなかった。

日曜の午前十一時二十分。いかにオフシーズンとはいえ、ローマの中心地にしてはあまりに閑散としている。広場に面した商店はカフェテリアとタバコ屋をのぞいて、まだ店を開けていなかった。日曜なので一日中閉めたままなのかも知れない。

閑散としていたが薄陽のせいか広場はいつもよりずっと狭く感じた。老人の姿は消えていた。

十一時半に妻と今立っているパンテオンの柱廊玄関前で待ち合せをしていた。彼女は他に用事があると言って、私よりもずっと前に出掛けたのだ。薄いえび茶色のレインコートを着て、ムラサキ色のネッカチーフをかぶり、ホテルを出たはずである。私はそれから一時間後に出た。ベルベリーニ広場脇にあるホテルからトリトーネ通りを

下ってコルソ大通りを歩いて来たが、途中で入り方を間違えて、いくつもの露路をさまよってしまった。それでも予定の時刻より少し早く着いたのは、足早に探し廻っていたからだった。

妻とは五日前にパリを経由して東京からやって来たのだ。私にとってはある目的があったが彼女には観光旅行であった。

ホテルを出る前に私たちは交替でシャワーをあびた。彼女は髪をシャンプで洗い、この夏気長に丁寧に焼いた小麦色の肌を香料入りの石鹸で、これも丹念に洗った。私の方はいつものようにろくに石鹸も使わず、シャワーをあびただけで素早く浴室を出た。彼女は素裸のまま部屋に備えつけの鏡台に向い、化粧水で顔を拭いていた。鏡のなかの妻の顔の後ろに私の裸の下半身が映り、彼女にも硬直しだした夫の陰茎が見えているはずだったが、ほとんど表情を変えずパフでやや陰気なアンバー色の顔彩を顔にはたき、銀色っぽい桃色の口紅をいつもよりは薄く見える唇に塗った。心持ち口許が微笑したように思えたが、灰褐色がかった瞳は明らかに私の下腹部の反応に対して軽蔑を現わしていた。

四十歳近い今でも彼女は確かに美しかった。女としては太すぎる眉でさえ、彼女の

美貌には、マイナスにならなかったし、やや長めの鼻はある気品をただよわせていた。もし彼女が私の妻でなければ再び恋をしてもいい容貌と肉体とを持っていたと断言できる。あの冷やかな灰褐色の瞳がその朝の私に場違いな欲情をかきたてたのは、何年振りかの二人だけの外国旅行と、ホテルという非日常的な場所のせいだったかも知れない。あるいは白いカーテンを透して射し込んで来たローマの淡い光のせいだったかも知れない。私たちはすでに三か月以上関係していなかったのだ。

私は妻が自分から立ちあがるのを、辛抱強く待って、後ろから抱きかかえ、部厚い絨毯の敷きつめてある床に力まかせに押し倒した。いつもの妻ならここで激しく抵抗するはずだったが、その朝の彼女はむしろ拍子抜けするぐらい簡単に私の要求に柔順だった。だが膣の内部は決して濡れようとせず、まだ充分に弾力のある腰は少しも動こうとはしなかった。かつての熱狂は倦怠という吸取紙の上でもうとっくに乾いてしまっていたのだ。無表情のまま天井を見ている見開いた彼女の目に、私は釘を打ち込みたかった。それにもかかわらず数分で私は射精した。

終始私たちは無言だったが、彼女は少し乱れた髪を整え、鼻の先端にほんのり浮かんだ汗をティッシュペーパーで拭いながら、鏡のなかの私に向って、今日ハンドバッ

グ買いに行くわ、とだけ言った。日曜で店は開いていないはずだが、とまだ裸のままでいる私は言った。萎えた陰茎が鏡のなかで彼女の耳飾りにふさわしく思えた。

――ホテルの店なら開いているはずだわ。

彼女は鏡を見すえたまま、ぶっきら棒に言った。目の荒い絨毯でこすられ、赤味をおびた軽い掻傷の残っている妻の臀をぼんやり眺めた。

――今日でなくても、明日でもいいじゃないか。

論争するつもりははじめからなかったのだ。

――いいえ、絶対に今日欲しいの！

妻の語調は激しかったが、表情の方はほとんど変っていなかった。その能面のような表情が私を沈黙させた。

さきほど店内にひっ込んだ給仕が再び出て来て、銀色のトレイの上に銀製のティーポットとトーストの皿をのせ、女のテーブルまで運んだ。

女は依然としてファインダーのなかでこちら側に背を向けたままだった。黒いコートの左肩にさっきまでなかった陽の斑点がゆらゆら揺れている。灰緑色の帽子からた

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo